

4. 森鷗外と医学留学生たちの交流

山崎 光夫

作家

森鷗外(本名・林太郎、1862~1922)は、明治・大正期に活躍した医者にして文豪である。その他に、軍人、官吏、教育者の顔も持っていた。文筆関連では、小説家、詩人、翻訳家、美学者、歴史考証家、文明評論家、伝記作家とじつに多彩だった。

鷗外は文久二年一月十九日、岩見国(島根県)鹿足郡津和野町に、父静男、母峰子の長男(三男一女)として生まれた。森家は典医として、代々医術をもって藩主に仕えていた。

鷗外が生まれた文久二年は、明治維新(1868年)まであと六年という、幕末の激動期だった。この年、京都で寺田屋騒動が起こり、武蔵国生麦村(横浜市鶴見区)で生麦事件が発生している。江戸幕府、二百六十年余の旧弊や矛盾が出来ていて、もはや将軍家に幕藩体制を維持する力は残っていなかった。

当時、四万三千石の津和野藩は十二代藩主の亀井茲監(1825~1885)が治めていた。石州和紙と蠟の増産により殖産興業を図り、同時に、藩士の教育に力を入れていた。先見の明のある優れた藩主だった。藩校・養老館での教科は、それまで漢学、礼学、数学、兵学、医学だったが、これに茲監は国学を加えた。また、医学の中に蘭医科を設けた。当時の最新医学ともいえる蘭方医学を取り入れる進取の精神があふれていた。こうした茲監の改革により、藩校で新しいうねりが定着したころの、明治二年(1869年)に鷗外は七歳で養老館に入学した。四書、五経の素読を受け、家では父親からオランダ語を学んだ。利発な子どもで成績も優秀だった。

森家の親戚筋に津和野出身の西周(1829~97)がいる。西周は鷗外が生まれた文久二年に、津田

真道らとオランダに留学を果たしている。帰国後は開成所教授となり、徳川慶喜に仕えた。維新後は沼津兵学校頭取を経て、陸軍省に出仕した。また、西洋の学問や思想の紹介にも努め、啓蒙思想家として活躍する。

鷗外より三十三歳年上のこの西周の勧めがあり、また、父、静男が藩主から上京を促されている、森家は上京を決意した。一家に先立ち、鷗外が十歳の明治五年六月、父に従って上京、向島小梅村の亀井家下屋敷に荷をほどこき、間もなく近所の借家に移った。ドイツ語の予備校に通つてのち、明治六年(1873年)十一月、第一大学区医学校予科(後の東京大学医学部)に入学する。場所は、下谷和泉橋の旧藤堂屋敷跡にあった。入学の際、二歳水増して万延元年(1860年)生まれとして願書を提出した。規定では、予科への入学年齢は十四歳から十九歳までだった。鷗外はこのとき、十一歳十カ月だったので、入学条件を満たしていないために、年齢を水増したのである。

さらに、明治十年(1877年)四月、東京大学医学部の本科に進んだ。場所は、本郷本富士町加賀藩邸跡で、ここの寄宿舎に移り官費生となった。

東京大学は明治十年(1877年)四月十二日、東京医学校(第一大学区医学校を学制改革により明治七年に改称した)と開成学校を合併し、四学部を設け総合大学として創立された。医学校は「医学部」と改称された。鷗外は東京大学医学部が誕生した記念すべき年に本科に入学したのである。

この寄宿舎時代に終生の友となり、鷗外をして、遺言で、

「余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリ」

と言わしめた賀古鶴所かこつるどと親交を深めている。死の三日前にこの遺言を病床のかたわらで筆受したのは賀古である。鶴所は日本の耳鼻咽喉科の創始者として知られている。鷗外は、この医学生時代に書物を濫読し、漢学や和歌については個別の師に指導を仰いでいる。

明治十四年（1881年）、七月四日に卒業した。卒業生は二十八人。成績の一、二番は文部省から国費留学生として海外留学ができた。だが、鷗外は八番だった。

鷗外の成績が振るわなかった理由として、肋膜炎を患った、寄宿舎を出て下宿住まいをしたところ火災にあってノート類を焼失した、外国教師と折り合いが悪かったなどがいわれている。

ちなみに、一番は、三浦守治みうらもりはるで、のちに東京大学医学部病理学教授。二番は、高橋順太郎だった。友人の鶴所は、二十一番。鷗外は留学を一大目標にしていたが、文部省からの海外留学は諦めねばならなかった。そこで陸軍省に入り、十二月十六日、陸軍軍医副（中尉相当）に任ぜられ、東京陸軍病院治療課に勤務する。不本意ながら軍医生活が始まったのである。

やがて、鷗外の能力が評価される業績が生まれた。明治十五年の後半から、陸軍軍医本部庶務課勤務となり、プロシア陸軍衛生制度を研究する運びとなった。プラアゲルの陸軍軍医組織や法規の書をもとに、『医政全書稿本』（全十二巻）を編述した。この大著は鷗外の語学力を如実に示した。陸軍省内で鷗外を留学させる環境は整いつつあった。

明治十七年（1884年）六月六日、

「独逸国留学被仰付候事」

の辞令は交付された。

陸軍二等軍医の地位で、陸軍衛生制度調査および軍陣衛生学研究のためドイツ留学を命じられた。念願の洋行が実現する。

明治十七年八月二十四日、仏船メンザレエ号で横浜を出港。同乗の医家に、片山国嘉かたやまくによし、隈川宗雄くまがわむねお、萩原三圭はぎはらさんけい、長与称吉ながよししょうきちなどがいた。十月七日フランス、マルセイユ港に入港、十一日にベルリンに到着し、ドイツ留学が始まった。

鷗外はこの十月から明治二十一年七月までの四年弱の留学生活を送る。ベルリン、ライプツヒヒ、ドレスデン、ミュンヘン、ベルリンと移動して研究を続けた。

そして、明治二十一年（1888年）六月三日にベルリン、フリードリッヒ写真館で医学留学生たちとともに記念写真を撮る。〔写真は文京区立本郷図書館鷗外記念室蔵〕

この日の鷗外の『隊務日記』（明治二十一年三月十日～七月二日）の記述――

「三日。至両營。有新病兵二人。閱為務受害状一。此日呈五月第一大隊病兵表二。本表不藉病院助手之手而製之。從穀獵兒之命也。」
写真撮影にまつわる記述はない。

鷗外は一人、軍服姿である。このとき、プロシア軍の隊付医官の業務に就いていて、その任務にふさわしい服装だった。

フリードリッヒ写真館には、計十九名の日本人医学者が集合した。その後、この陣容でのシャッターチャンスはなかった。

写真は、陸軍省医務局長（軍医監）兼内務省衛生局員の石黒忠憲ただのりがベルリンを訪れていたのを機に、記念に撮られたものである。石黒は明治二十年（1887年）九月に、ドイツのバーデン国都カールスルーエで開催された第四回赤十字国際会議に政府委員として出席したため、七月にベルリンに到着していた。その石黒を中央に当時のドイツ医学留学生たちが一堂に会したのである。錚々たるメンバーが揃った。

以下の陣容である。（カッコ内は日本からの出発と帰国の年月日及び帰国後の主な役職）

- ・河本重次郎こうもとじゅうじろう（明治十八年十二月十九日～明治二十二年五月十九日・東大初代眼科教授）
- ・片山国嘉かたやまくによし（明治十七年八月二十四日～明治二十一年十月三十日・日本法医学のパイオニア）
- ・山根正次やまねまさつぐ（明治二十年十月八日～明治二十四年七月二十三日・日本医学校初代校長）
- ・中浜東一郎なかはまとういちろう（明治十八年十二月四日～明治二十二年二月二十五日・日本保険医学協会会長）
- ・田口和美たぐちかずよし（明治二十年五月二十八日～明治二十

- 二年十月四日・日本解剖学会会頭)
- ・ 浜田玄達 (明治十八年一月～明治二十一年九月十八日・日本産科学のパイオニア)
 - ・ 島田武次 (明治十九年十一月～明治二十三年七月二十五日・宮城病院婦人科産科長)
 - ・ 加藤照麿 (明治十七年四月二十日～明治二十一年十月十九日・大正天皇侍医)
 - ・ 北川乙次郎 (明治二十年五月二十八日～明治二十二年十二月一日・和歌山県立病院長)
 - ・ 瀬川昌著 (明治二十一年四月八日～明治二十四年六月十八日・東京小児科病院設立)
 - ・ 隈川宗雄 (明治十七年十月八日～明治二十二年十二月四日・日本医化学のパイオニア)
 - ・ 江口 襄 (明治二十年十月八日～明治二十二年十月二日・日赤三重支部山田病院長)
 - ・ 谷口 謙 (明治十九年八月七日～明治二十二年十一月六日・陸軍第五師団軍医部長)
 - ・ 佐方潛三 (明治十六年～明治二十三年三月二十一日・宮内省侍医局勤務)
 - ・ 尾沢圭一 (明治二十一年四月八日、明治二十二年五月二十一日、上海にて客死)
 - ・ 武嶋 務 (明治十九年、明治二十三年五月十七日、ドレスデンにて客死)
 - ・ 北里柴三郎 (明治十八年十二月 四日～明治二十五年五月二十八日・破傷風 菌の純粹培養、ジフテリアの血清治療、ペスト菌発見)

それに、森鷗外(明治十七年八月二十四日～明治二十一年九月十八日)である。

いづれも帰国後、日本の近代医学の発展に寄与した医学者たちだった。国家を背負った、いわばエリート医学者集団の記念撮影といえる。だが、この一枚の写真からあぶり出されるのは、単なる記念写真の枠を越え、明治に生きた医学者たちの挫折や悲哀、苦闘である。成功と栄光ばかりではなかった。留学生という境遇に、「国家」と「個」の問題がふりかかる。知識人ゆえの苦しみともいえるだろう。ここには、もうひとつの明治近代史が垣間見られる。

鷗外はこの撮影のほぼ一カ月後の明治二十一年七月五日、石黒忠憲とともにベルリンを発ち、帰国の途についている。

鷗外とドイツ在住の医学留学生たちの交流の様子は鷗外の残した『獨逸日記』(明治十七年十月十二日～明治二十一年四月一日)に詳しい。ベルリンという当時、世界の中心ともいえる大都市で青春時代を送る医学生、その若者たちによって人間ドラマが繰り広げられた。

フリードリッヒ写真館の写真はその主な登場人物たちをフレーム内に奇蹟的に集合させている。

[参考文献]

- 「森鷗外全集」森林太郎，昭和五十年，岩波書店。
- 「東京大学医学部百年史」東京大学医学部百年史編集委員会編，昭和四十二年，東京大学出版会。
- 「鷗外「キタ・セクスアリス」考」長谷川泉，平成三年，明治書院。
- 「日本の医療史」酒井シヅ，昭和五十七年，東京書籍。
- 「二生を行く人」山崎一穎，平成三年，新典社。